

－ 資 料 －

乳児保育のテキスト類に見る「教育」について

永 井 久美子

An Analysis of Infant-Rearing Textbooks Focusing on Education

Kumiko NAGAI

要 旨

本研究では、乳児保育のテキスト類を分析することを通して、乳児期の「教育」の捉え方を整理し、その特性を明らかにすることを目的とする。調査結果から5つの点を明らかにした。(1) どのテキストにもページ数の3分の1程度が、遊びや教育について書かれている。(2) 「発達に応じた保育」では、保育の養護的側面と教育的側面は、切り離せるものではなく、密接に関連して日々の保育が展開される。(3) 「環境との相互作用」では、保育者は、乳児が興味・関心を示すものに感性のアンテナを張りめぐらせ、安心して没頭できる遊びの環境と体験に、共感的にかかわることが重要である。(4) 「活動の豊かな展開」では、子ども達の興味・関心、また探究心を思う存分満たせるように環境を準備する事が重要。(5) 「5領域」では、保育所保育指針に書いている事をふまえながら、「人間関係」「環境」を中心として、言葉や表現の育ちを支えていく事が示された。

キーワード：乳児保育，教育，遊び，養成教育，テキスト

I 問題設定

I-1 はじめに

保育所保育指針によると、保育所における保育は、「養護と教育を一体的に行う」ことが特性であり、それは、0歳児から就学前までの保育所生活を通して一貫した考え方である。それでは、保育現場では乳児に対してどのような「教育」を想定して保育が行われているのであろうか。また、保育士の養成段階の必須科目である「乳児保育」の授業の中で、どのような「(乳幼児期の)教育」を想定して授業が行われているのだろうか。ここでいう「教育」とは、保育所保育の最低基準である保育所保育指針において述べられている教育観を前提に話を進める。

現行の保育所保育指針において「『教育』とは子どもが健やかに成長し、その活動がより豊かに展開されるための発達の援助であり、『健康』『人間関係』『環境』『言葉』及び『表現』の5領域から構成される。」と示されており、子どもの主体的な活動を通して心情・意欲・態度

などを育てていく事が5領域のねらいに示されている。

厚生労働省の定めた保育士養成校の養成カリキュラムに位置づけられている各授業科目においては、保育所保育指針のこのような「教育」観を持って行われているはずであり、0・1・2歳児クラスの保育のあり方や方法について学ぶ「乳児保育」においても、「(乳児期の)教育」の意味を深く理解していくことは、保育者になっていく学生にとって重要なことであると思われる。それでは、その養成段階で使用される「乳児保育」のテキスト類には、「(乳児期の)教育」についてどのように記載されているのだろうか。そのための調査として、テキスト類の文献調査(目次)から分類を試みた。

具体的には、2008年以降の乳児保育のテキストを元に「教育」について調査を行った。これらのテキスト類は、主に保育者養成校で用いられるものであり、執筆者の多くは研究者・保育実践家であり、執筆に際してはこれまでの知見や実践から感じ取ったものなどが盛り込まれていると考えられるからである。また、現行の保育所保育指針は、2008年3月に改定告示されたものであり、この改定をふまえた2008年以降の乳児保育のテキストを検討することにより、現在、保育者養成校において流布していると考えられる、保育における子どもの「教育」について整理を行うことができると考えられるからである。

以上のことをふまえ、本研究では、乳児保育のテキスト類を分析することを通して、乳児期の「教育」の捉え方を整理し、その特性を明らかにすることを目的とする。

I-2 保育所保育指針における「教育」観の整理

ここで、本研究の前提となる保育所保育指針の記述内容を押さえておく。この節における以下の文章は、基本的には保育所保育指針(以下、「指針」と略記)の引用である。

(1) 養護と教育を一体的に行うことについて

前述したことも重なるが、指針の「第3章 保育の内容」の前文部分においては、次のように示されている。(以下、指針の引用箇所は、斜体で示す。)

○「養護」とは、*子どもの生命の保持及び情緒の安定を図るために保育士等が行う援助や関わり*である。

○「教育」とは子どもが健やかに成長し、*その活動がより豊かに展開されるための発達の援助*であり、「健康」、「人間関係」、「環境」、「言葉」及び「表現」の5領域から構成される。

○ねらいは、第1章(総則)に示された保育目標をより具体化したものであり、子どもが保育所において、*安心した生活を送り、充実した活動ができるように、(中略)及び子どもが身に付けることが望まれる心情、意欲、態度などの事項を示したものである。*

また、指針においては、5領域についての記述後に、「保育の実施上の配慮事項」があるが、

そこには次のように示されている（部分抜粋）。

① 保育に関わる全般的な配慮事項

ウ 子どもが自ら周囲に働きかけ、試行錯誤しつつ自分の力で行う活動を見守りながら、適切に援助すること。

② 3歳未満児の保育に関わる配慮事項

ウ 探索活動が十分できるように、事故防止に努めながら活動しやすい環境を整え、全身を使う遊びなど様々な遊びを取り入れること。

エ 子どもの自我の育ちを見守り、その気持ちを受け止めるとともに、保育士等が仲立ちとなつて、友達の気持ちや友達との関わりを丁寧に伝えていくこと。

オ 情緒の安定を図りながら、子どもの自発的な活動を促していくこと。

以上を踏まえると、指針において「教育」は、次のように整理できる。すなわち、「活動（遊び）がより豊かに展開されるために発達を援助すること」、「5領域の視点から発達を促し、心情・意欲・態度などを子どもが身につけていけるように援助すること」、「子どもが環境に関わって、自分の力で行っていけるように援助すること」、とくに乳児期においてはその発達の特性を踏まえて「探索活動・全身を使う遊びの様々な遊びを取り入れること」、「自発的な活動を促すこと」、さらに「自我の育ちを見守り、受け止めること」「友達の気持ちや友達との関わりを丁寧に伝えていくこと」などを通して情緒の安定を図ることも「養護と教育を一体的に行う」ためにおさえておかなければならない点である。

（2）保育の方法と保育の環境について

続いて、指針の「第1章総則」に示されている「保育の方法」と「保育の環境」については以下のように整理できる。

「情緒の安定」においては、「子どもが安心感と信頼感を持って活動できる」「子どもの主体としての思いや願いを受け止める」「情緒の安定した生活ができる」「温かな親しみとくつろぎの場としての環境」ことが大切であり、「教育」の視点では「子どもの主体的な活動を大切にする」「自己を発揮できる環境やかかわり」「生き生きと活動できる場としての環境やかかわり」「自発的、意欲的に関われるような環境やかかわり」「一人一人の発達過程に配慮する」などが大切である。

（3）発達の捉え方

指針の「教育」の視点では「発達を促すこと（援助すること）」が示されているが、指針の発達観として、「第2章 子どもの発達」から関連箇所を引用する。すなわち、「発達は、環境への働きかけ、環境との相互作用が大事」「人への信頼感と自己の主体性を形成していくこと

が大事」「愛され、信頼されることで情緒が安定し、人への信頼感が育つ」「身近な環境に自発的に働きかけることで、自我が芽生える」「子どもを取り巻く環境に主体的に関わることにより、心身の発達が促される」「大人との信頼関係を基にして、子ども同士の関係を持つようになる」「乳幼児期には、生理的、身体的な諸条件や生育環境の違いにより、一人一人の心身の発達の個人差が大きい」と示されている。

(4) 指針の「教育」観を踏まえた「保育者の教育的なかかわり」とは

上記(1)～(3)を踏まえると、指針による「保育者の教育的なかかわり」を考えるためには、大きく次の2点から考えることができる。

- ① 活動・遊びの視点・・・「発達に応じた保育」「環境との相互作用」「活動の豊かな展開」
- ② 5領域の視点・・・「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」

この2つの視点を踏まえて、指針の記述内容を整理すると、次の表1、表2になる。

この表1・2に関連付けてテキスト類から関連箇所を抜き出し、分析を行っていく。

表1 活動にかかわる保育者の教育的なかかわり

<p>「発達に応じた保育」「環境との相互作用」</p> <ul style="list-style-type: none"> ★子どもは、大人によって生命を守られ、愛され、信頼されることにより、情緒が安定するとともに、人への信頼感が育つ。 ★身近な環境(人、自然、事物、出来事など)に関心をもつ。 ★身近な環境(人、自然、事物、出来事など)に自発的に働きかける。 ★子どもを取り巻く環境に主体的に関わる。 ★子どもは、大人との信頼関係を基にして、子ども同士の関係を持つようになる。 ★身体的な発達及び知的な発達とともに、情緒的、社会的及び道徳的な発達が促される。 ★子どもの主体的な活動を大切にする ★自己を発揮できる環境やかかわり ★生き生きと活動できる場としての環境やかかわり ★自発的、意欲的に関わられるような環境やかかわり ★一人一人の発達過程に配慮する <p>「活動の豊かな展開」</p> <ul style="list-style-type: none"> ★子どもが自分であろうとする気持ちの尊重 ★探索活動・全身を使う遊びの様々な遊びを取り入れること ★自発的な活動を促すこと ★自我の育ちを見守り、受け止めること ★友達の気持ちや友達との関わりを丁寧に伝えていくこと
--

II 調査および分析の方法

(1) 調査対象

今回の調査対象のテキスト類は、下記の3つの基準で抽出したものである。

- ①書名に「乳児」「保育」の2つのワードを含むもの
- ②保育者養成校で使用されるテキスト(教科書)として出版されたもの
- ③2008年以降に出版されたもの

表2 5領域にかかわる保育者の教育的なかかわり

<p>「健康」</p> <ul style="list-style-type: none"> ★保育士や友達と触れ合い，安定感を持って生活する。 ★十分に体を動かせるようにする。 ★様々な活動に親しみ，楽しんで取り組む。 ★健康な生活リズムを身につける。 ★楽しんで食事をする。 <p>「人間関係」</p> <ul style="list-style-type: none"> ★安心できる保育士との関係作り ★身近な大人や友達に関心を持てるようにする。 ★模倣して遊ぶ。 ★親しみを持って自ら関わろうとする。 ★保育士や友達との安定した関係の中で，共に過ごす喜びを味わう。 ★自分でできることは自分でする。 <p>「環境」</p> <ul style="list-style-type: none"> ★五感の働きを豊かにする。 ★好きな玩具や遊具に興味を持って関わり，様々な遊びを楽しめるようにする。 ★自然に触れて生活できるようにする。 ★自然の大きさ，美しさ，不思議さなどに気づけるようにする。 ★様々な物に触れ，その性質や仕組みに興味や関心を持つ。 <p>「言葉」</p> <ul style="list-style-type: none"> ★応答的な関わりや話しかけ ★言葉のやりとりを楽しめるようにする。 ★言葉や話に興味や関心を持ち，親しみを持って聞いたり，話したりできるようにする。 ★したいこと，してほしいことを言葉で表現できるようにする。 ★わからないことを尋ねたりできるようにする。 <p>「表現」</p> <ul style="list-style-type: none"> ★様々な素材に触れて楽しむ。 ★体を動かしたりして遊ぶ。 ★生活の中で様々なことに気づいたり，感じたりして楽しむ。 ★生活の中で様々なことに触れ，イメージを豊かにする。

この3つの条件で抽出されたのは，21冊で，付表にリストで示したA～Uのテキスト類である。ここで2008年以降に限定したのは，2008年3月の保育所保育指針の改定を受けて，出版・改訂されたものであると考えられるからである。また，2014年7月の調査開始時点で出版されている乳児保育のテキスト類は，この21冊であった。

(2) データ分析方法

それぞれのテキスト類を分析するカテゴリとして，下記の表3の分類基準を作成した。

この表3は，厚生労働省が示している保育士養成課程カリキュラムの「教科目の教授内容」の「乳児保育」を参照して作成したもので，具体的には，そこに示されている目標として「1. 乳児保育の理念と役割」「2. 乳児保育の現状と課題」「3. 3歳未満児の発達と保育内容」「4. 乳児保育の実際」「5. 乳児保育における連携」の5つが挙げられている。さらに，この5つの分類に従いながら，各テキストの独自性も考え「6. 保健衛生や事故・安全」「7. 保育者の専門性」「8. 障害・配慮を必要とする子ども」「9. その他」を付け加えた。これらの9つの分類項目にさらに，下位概念の分類項目も検討し，表3を作成した。

表3 分析カテゴリー

	分類項目	下位分類
教科目の 教授 内容	1. 乳児保育の理念と役割	1-1 乳児保育の意義・概念
		1-2 乳児保育の歴史
	2. 乳児保育の現状と課題	2-1 現状把握・社会的背景・課題
		2-2 生活の連続性
		2-3 日本国内のその他乳児保育施設
	3. 3歳未満児の発達と保育内容	3-1 発達理解
		3-2 発達過程に応じた保育のあり方
		3-3 養護（情緒の安定）
		3-4 遊びや教育の理解・保育内容
	4. 乳児保育の実際	4-1 指導計画（評価反省記録も含める）
		4-2 保育環境
		4-3 職員間の協働
	5. 乳児保育における連携	5-1 保護者支援
		5-2 地域子育て支援
5-3 家庭との連携		
5-4 他機関との連携		
追加 項目	6. 保健衛生や事故・安全	6-1 保健衛生的な視点
		6-2 事故・安全
	7. 保育者の専門性	7-1 保育者の専門性
	8. 障害・配慮を必要とする子ども	8-1 障害・配慮を必要とする子ども
		9-1 乳児保育の諸外国の動向や歴史
		9-2 食育
		9-3 異文化・宗教
	9. その他	9-4 その他

注) ここでは、「養護」の部分には、情緒の安定のみを抜き出しており、生命の保持の内容に関しては、「6-1 保健衛生的な視点」に記載している。

(3) 調査1 目次の分析手順

- ① 1冊1冊のテキスト類の目次を検討するにあたって、章と節に分けて検討した。ただし、テキスト類の中には、章や節を明記せずに、「Lesson」などのように表記されているものもあるが、ボリュームから考えて、章なのか節なのかを区分する事にした。
- ② 各テキスト類の各章を、上記の分析カテゴリーの「1-1」～「9-4」まで分類し、カテゴリー分けを行った。
- ③ 引き続き、各節ごとのカテゴリー分けを②と同様に行った。
- ④ ②③によって得られたデータをMS-Excelにて整理し、分析資料とした。

(4) 調査2 「教育」について、ふれている箇所の抽出手順

- ① 上記の分析カテゴリーの中で、「3-1」～「4-3」すなわち、「3. 3歳未満児の発達と保育内容」「4. 乳児保育の実際」に、カテゴリー分けをしたものを抽出対象とした。
- ② さらに、乳児期の教育観を端的に示していると考えられる「3-1 発達理解」「3-2

発達過程に応じた保育のあり方」「3-4 遊びや教育の理解・保育内容」「4-2 保育環境」に絞り込み、テキスト類の本文の中から関連箇所を原文のまま抜き出し、分析対象とした。

Ⅲ 調査1の結果

(1) テキスト類の章・節のカテゴリー分けした結果

一冊あたりの平均が8章で構成されており、テキスト類21冊の章ごとの分類は合計で168章分ある事がわかった。また、一冊あたりの平均が27節で構成されており、節ごとの分類は合計で566節分ある事がわかった。これらのカテゴリーごとの内訳は、表4に示すとおりである。

表4によると、章レベルでは、「3. 3歳未満児の発達と保育内容」40.5%、「4. 乳児保育の実際」13.1%、全体の53.6%を占めている。節レベルでは、「3. 3歳未満児の発達と保育内容」38.3%、「4. 乳児保育の実際」16.8%、全体の55.1%を占めている。

表4 分析カテゴリーによる結果の内訳

教科目の教授内容	下位分類	章 (実数)	節 (実数)	章 (%)	節 (%)	
教科目の教授内容	1. 乳児保育の理念と役割	1-1 乳児保育の意義・概念	16	16	9.5	2.8
		1-2 乳児保育の歴史	10	21	6.0	3.7
		小計	26	37	15.5	6.5
	2. 乳児保育の現状と課題	2-1 現状把握・社会的背景・課題	19	71	11.3	12.5
		2-2 生活の連続性	4	8	2.4	1.4
		2-3 日本国内のその他乳児保育施設	1	20	0.6	3.5
		小計	24	99	14.3	17.4
	3. 3歳未満児の発達と保育内容	3-1 発達理解	28	97	16.7	17.1
		3-2 発達過程に応じた保育のあり方	19	50	11.3	8.8
		3-3 養護（情緒的安定）	10	35	6.0	6.2
		3-4 遊びや教育の理解・保育内容	11	35	6.5	6.2
		小計	68	217	40.5	38.3
	4. 乳児保育の実際	4-1 指導計画（評価反省記録も含める）	14	61	8.3	10.8
		4-2 保育環境	6	26	3.6	4.6
		4-3 職員間の協働	2	8	1.2	1.4
		小計	22	95	13.1	16.8
	5. 乳児保育における連携	5-1 保護者支援	0	11	0	1.9
		5-2 地域子育て支援	3	13	1.8	2.3
		5-3 家庭との連携	4	10	2.4	1.8
		5-4 他機関との連携	2	7	1.2	1.2
小計		9	41	5.4	7.2	
追加項目	6. 保健衛生や事故・安全	6-1 保健衛生的な視点	10	34	6.0	6.0
		6-2 事故・安全	2	11	1.2	1.9
		小計	12	45	7.2	7.9
	7. 保育者の専門性	7-1 保育者の専門性	2	12	1.2	2.1
		小計	2	12	1.2	2.1
	8. 障害・配慮を必要とする子ども	8-1 障害・配慮を必要とする子ども	3	8	1.8	1.4
		小計	3	8	1.8	1.4
	9. その他	9-1 乳児保育の諸外国の動向や歴史	0	1	0	0.2
		9-2 食育	1	3	0.6	0.5
		9-3 異文化・宗教	0	2	0	0.4
9-4 その他		1	6	0.6	1.1	
小計		2	12	1.2	2.2	
	合計	168	566	100	100	

(2) テキスト類の章・節の中に含まれる「教育」について書かれている割合

さらに、本研究の中心テーマである「教育」については、3-2, 3-4, および4-1, 4-2は、それぞれ章レベルで順に11.3%, 6.5%, 8.3%, 3.6%であり、合わせると全体の29.7%となっている。同じく節レベルでは、8.8%, 6.2%, 10.8%, 4.6%であり、合わせると全体の30.4%となっている。すなわち、全テキスト類のうち章レベルと節レベルで約三分の一が、乳児期の教育についてふれている事がわかる。

IV 調査2「テキスト類における教育の捉え方」の結果ーテキスト類の関連箇所引用からー

上記のように、全体の三分の一で「乳児期の教育」について触れられているが、ここでは、具体的に文章を引用しながら、テキスト類における「乳児期の教育」について、整理を行う。

1-2で示したように、保育所保育指針では、「養護と教育を一体的に行うこと」、さらに、「教育」とは、「活動の豊かな展開」「5領域」の2つの視点から説明されている。

そこで、「保育所保育指針」の教育観をより具体的にしていくために、テキスト類から引用するにあたっては、上記の視点から教育的なかかわりについて抜き出すことにした。そこで、IV-1「発達に応じた保育」「環境との相互作用」「活動の豊かな展開」、IV-2「5領域」の順に整理する。

IV-1「発達に応じた保育」「環境との相互作用」「活動の豊かな展開」

以下、テキスト類から関連箇所を引用するにあたり、(L:130)(E:67)などと記号を付して、どのテキストの何ページからの引用かを明確にわかるようにした。(L:130)は、「付表 分析対象のテキスト」に示されているLのテキストの130ページからの引用である事を示す。また、斜体はテキスト類の引用を示す。下線は、後程出てくる表5・表6に関連するところを示している。

① (L:130) またこの時期の玩具は、音や色などによって感覚を刺激して発達をうながすものが主となるが、それぞれの乳児の発達にふさわしいものを選び、また安全性や衛生に留意しておかなければならない。

② (E:67) 遊び

身体の発育発達の個人差もあるが、興味・範囲、種類、深さなども子ども一人ひとり異なっている。また、自分の力で移動できるようになってきたこの時期に自分のペースで感じる、考える、やってみることは、五感をとおして全身で知的な学び体験となる。さらに自分の声や身体で遊ぶようなこともあり、必ずしもおもちゃだけが遊びの対象ではない。

保育者は、乳児が興味・関心を示すものに感性のアンテナを張りめぐらせ、周辺の安全点検をこまめに行いながら、安心して没頭できる遊びの環境と体験に、共感的にかかわることが重要である。このような保育が、養護と教育を一体的に行う環境といえるのである。

③ (G : 137) 食事と同様に、どんな場面でも子どもの“やりたい”“やってみよう”と思う気持ちを大切に、更なる意欲につながっていくように配慮しています。例えば、ふたばルーム(0歳児クラス)では、壁におもちゃを取り付けることで、座ることができるように子どもや、つかまり立ちができるようになった子ども(もしくは、つかまり立ちしようとしている子ども)がその姿勢のまま遊べます。少し高い位置にあるおもちゃに手を伸ばし、届いたときの達成感に満ちた子どもの表情を受け止めることが幸せな瞬間でもあります。

壁掛けのおもちゃには、マジックテープやファスナー、滑車の車輪、スイッチなど子どもが日常生活の中で、“触れてみたい”“いじってみたい”という興味・関心を遊びの中で満たすことができるように用意しています。生活の中ではつい「触っちゃだめ」と怒ってしまったり、“子どもの手が届かない場所に”遠ざける物が多くありますが、子どもは大人がすることは何でも真似したいと思います。そんな子ども達の興味・関心、また探究心を思う存分満たせるように担任間で知恵を出し合い、おもちゃを用意しています。

④ (D : 12) ここで考える育ちに重要なことは、あるべき姿として「自立をめざして保育する」ということではなく、「今、ここ」が充実している、今ここのただ中の生活が豊かに展開されていることを第1に考えるということである。子どもが自ら向かうもの・ことを援助し、今を充実し続けたときに、その延長線上に「自立」ということがあると考えるものである。それはそのような結果を目的として、保育が展開されるのではなく、今のそのただ中、プロセスを充実して生きた結果「こう育った(=自立)」という、その多様なプロセスを第1に考える保育である。

⑤ (I : 54) 生活のなかで行動を示しながら話しかける。

親しい大人とは積極的にかかわりをもととするので、生活のなかでのかかわりを大切に、一つひとつの行動を保育者がやって示しながら、ゆっくりはっきりした言葉で話しかけるようにする。「今日は、砂場であそびましょうね。さあ、靴をはきましょう。こっちは右の足、こっちは左の足、はけた、はけた、だいじょうぶかしら・・・」など。まだ右左はわからなくても、言葉と保育者の行動は結びつけることができる。子どもにやらせるのではなく保育者が生活する姿を見せることが大切である。

⑥ (I : 55) くり返しの意味

絵本、歌、音楽などを楽しめるようになる。生活のなかで保育者が歌を歌ったり子どもと一緒に音楽を聴いたりする。好きなものは何度でもくり返し読んでもらいたがったり、聞きたがったりする。くり返すことによってイメージがより鮮明になり、確かなものになっていく。子どもが納得し満足するまでくり返すことにはこのような意味がある。

これらの①～⑥の要点をまとめると、「発達に応じた保育」については、保育の養護的側面(生命の保持と情緒の安定を図る機能)と教育的側面(乳幼児の遊びなどを通して経験を積み重ね

ていくことを援助する機能)は、切り離せるものではなく、密接に関連して日々の保育が展開されていくとまとめることができる。「環境との相互作用」については、保育者は、乳児が興味・関心を示すものに感性のアンテナを張りめぐらせ、周辺の安全点検をこまめに行いながら、安心して没頭できる遊びの環境と体験に、共感的にかかわることが重要であると言える。

「活動の豊かな展開」については、子ども達の興味・関心、また探究心を思う存分満たせるように知恵を出し合い、環境を準備していく事、くり返すことによってイメージがより鮮明になり、確かなものになっていけるようにする事が重要だといえる。

IV-2 「5領域」

1) 領域「健康」に関するもの

① (Q:28) たとえば、はいはいが「できる」ようになったといっても、どんな這い方をしてるかよく見てみましょう。足の親指で床をけらずに両ひじだけで体を引き寄せて前進するような這い方だったりすることがあります。「できる」ように見えても、しっかりしたでき方になっていない場合には、丸めたふとんの上を這って超えるあそびなど、足の親指のけりを引き出すような楽しい働きかけをくふうしてみましょう。

子どもの活動意欲を育てながら弱い部分を克服できるように、配慮していくことが基本的にたいせつです。

② (K:49) 新生児期は、急激な環境の変化に対応できるよう、保健的・衛生的な環境で保育することが必要である。この時期のケアがその後の成長に大きく影響をおよぼすため、きめ細かい配慮をしたいものである。

生まれたばかりの赤ちゃんは、授乳のとき以外は眠って過ごすことが多いため、清潔で静かな場所でゆっくりと寝かせるように心がける。

2) 領域「人間関係」に関するもの

① (E:65-66) 「人間関係」(テキストに領域「人間関係」と明記されていたもの)

感情が細やかに分化してきて、簡単な言葉がわかったり話せる、声をたててよく笑ったり、人見知りや後追い、不満や不安、怒りなどの泣きもみられるようになる。この時期は、特定のおとなとの応答的なかかわりが心身の豊かな成長に大きく影響してくるために、子どもの思いに丁寧に対応していくことが保育者の基本的な姿勢となる。

特に、子どものネガティブな感情に対して、タイミングを逃さない応答と抱っこや身体に触れながらの安心感(アタッチメント)は、情緒の安定に重要である。人見知りや後追い泣きなどは、特定の人への愛着の表れであり、心の発達に必要なことなので、否定的にとらえずに、本人が納得できる形で安心感が得られるような配慮をする。そのようなしなやかな温かな受容に包まれた日々を積み重ねていくことのできる子どもは、他者への信頼感を育み、安心の輪が

広がって伸び伸びと興味や好奇心の輪も範囲を広げていくのである。

② (D : 119) 特に状態(敏活な不活動)においては、子どもが周囲に向かって積極的に働きかけている。このときの子どもの外への働きかけのサインはかすかであるが、周囲は、この働きかけにタイミングよく応答することが重要である。

たとえば、側で動くもの(世話をする大人の動きなど)に笑いかけたとき、世話をする大人がそれに気がつき微笑み返したり、話しかけたりしてかかわるという当たり前のことが展開される。子どもは自発的に働きかけることが、周囲に受け入れられ、そのやりとりを重ねることでその周囲を理解し、その理解する主体である「自己」に気がついていく源になると考えられる。

③ (Q : 27) 生まれてわずか数ヶ月でも、子どもは互いに手にふれたり見つめ合ったり、いっしょに声を出したり、他の子どもに対して気持ちを向けた行動を示します。はいはいや一人歩きなどで移動できるようになると、おもちゃの取り合いなどのぶつかり合いも増えますが、カーテンでイナイイナイバァーあそびを子ども同士で楽しむ姿などもよく見られるようになります。このような中で、0～3歳の子どもたちは互いに意識し合い、「〇〇ちゃんみたいに自分もやってみたい」思いをふくらませ、対等な「仲間」とのつき合い方を学んでいくでしょう。

その過程を仲立ちしサポートするのが、まさに保育士のたいせつな役目です。まずは、子どもが互いの「存在」に気づけるように、さらには互いの「思い」や「要求」に気づけるように、そして互いにみたとやつもり、ごっこなどのあそびのイメージをやりとりし広げ合うことができるように、考えとりくんでみましょう。

3) 領域「環境」に関するもの

① (E : 66-67) 「環境」(テキストに領域「環境」と明記されていたもの)

自分の意思で自分の力で行動できる範囲が広がり、探索活動が活発になってくるため、それぞれの発達過程に添った安全な環境づくりの配慮がさらに重要になってくる。物的な環境の配慮としては、広い空間よりも運動発達の個人差によって遊ぶ空間をくぎり、それぞれの欲求が満たされる環境のほうが、乳児は安定して過ごすことができる。さらに、玩具の数も同じものをある程度そろえ、一人ひとりが満足できる配慮が必要である。配置なども、乳児の運動発達、探索活動の様子、興味に添った工夫などをしながら整えていく。また、室内の音や色合いも環境として意識の中におき、保育者自身の話し方、服装、行動なども、環境の一部であることの自覚が必要である。

② (B : 160) 食器棚に見立てた段ボールの箱に、おもちゃのカップやお皿が整理されて並べられていれば、その食器棚のあるコーナーは、おうちごっこをより生き生きとさせるであろう。冷蔵庫に似せた白い箱に、おもちゃの食品が収められていればごちそうづくりはより多彩になるであろう。

片付けひとつで、その場や玩具が遊びを誘ったり、そうならなかったりする。「見立て」「つもり」をいっそう豊かにするために、コーナーや壁面、収納棚等を利用して、どの子どもにも見やすくイメージが湧くような示し方をしておきたいものである。

ブロックや積木は、大きさや色を揃えて片付けるようにすると、子ども自身が片付けやすくなる。車は車庫に並んでいた方が楽しいし、人形は大事にされていることが感じられるように椅子やベッドに置いておきたい。

4) 領域「言葉」に関するもの

① (B:58) およそ1年から1年6か月頃の間、子どもは初めて意味のある言葉を発するようになる。「マンマちょうだい」「あっ、あれはわたしの好きなバナナだ」など一文に相当する意味を表すこともあり、一語文とよばれる。したがって保育者は、この一語に込められた子どもの思いを捉え、その子の伝えなかった言葉を添えて補い、話したい気持ちを汲み取って会話の喜びを満たすことが大切である。

② (G:20) 特に乳児においては「泣く」「笑う」「身振りで要求する」など、言葉になる前の思いを表現していることを大人がしっかり受け止め、言葉で言い換えるという日々の関わりがとても重要です。自分が言葉で伝えようとする気持ちや考えを、真剣に聴いてくれる大人がいれば、伝えようとし、上手にできなくても一所懸命話そうとします。聴く力も話す力も、自分に共感してくれる大人が身近にいて、その人との信頼関係が確立していくことで、しっかり身につけていけるのではないのでしょうか。

③ (K:43) 言葉を獲得するための環境としては、親子関係を中心とした人間関係が適切であり、言語習得のための刺激が必要である。

日常生活の中で、「マンマ、食べようね」「お外、行こうね」など、大人の言葉がけを視覚・聴覚の働きで認識し、相手の言葉を聞き分けていく。そして、大人の口の動きや声を聞き、似た音を構成して、やがて「マンマ」「おんも」などの言葉を発声するのである。

このことから、大人とのコミュニケーションが言葉の発生を促すことがわかる。また、子どもが言葉を発しようとしているときは、大人が先を読んで「お外、行きたいのね」「マンマ、食べたいのね」と言うのではなく、子どもからの発声を待ち、一緒に会話をするよう語りかけることが、発語を促していくことにつながる。

5) 領域「表現」に関するもの

① (K:116) 保育の中に歌や楽器遊びなど、音楽を取り入れることは子どもの感性を豊かにする。子どもが眠るときには子守唄や静かな音楽を鳴らしたり、おむつ交換のときにじっとしているのが苦手な子に対して歌ったり、食事の前や気分転換のときの手遊びなど保育には欠かせないものである。

また、さまざまな音を楽しむものとして、楽器あそびがあげられる。1～2歳児がリズムに合わせて鳴らすことは難しいが、タンバリン・カスタネット・鈴など、さまざまな楽器に触れ、どのような音が鳴るのか楽しむのもよい経験となる。

②（Q：70）また、生活経験も広がり大人や自分が身近で体験したことの模倣や再現がさかんになり、やってみたいという気持ち（つもり）がふくらみます。一人ひとりのあそびから友だちと遊びたいという思いもふくらみ、友だちと同じことやったり言ったりして見立てをふくらませます。絵本を読んでもらったり、友だちと見たりする楽しい活動も多くなります。いろいろな体験をもとに生活再現あそび、ごっこあそびを豊かにします。お互いの気持ちがふくらむ時なので、友だちとのトラブルもありますが、大人が思いを十分に受け止めて、あそびの中で関わり方や友だちの「つもり」を学ぶようにしていきます。

以上をふまえて、5領域の視点で次のようにまとめる。

①5領域の「健康」では、乳児の活動では、「できる」事を求めるのではなく、楽しい働きかけをくふうして、子どもの活動意欲を育てながら弱い部分を克服できるように配慮していく事、また、保健的・衛生的な環境で保育することが必要であり、きめ細かな配慮が必要である事が指摘された。

②「人間関係」では、特定のおとなとの応答的なかわりが心身の豊かな成長に大きく影響してくるために、子どもの思いに丁寧に対応していくことが保育者の基本的な姿勢となる事、子どものネガティブな感情に対して、タイミングを逃さない応答と抱っこや身体に触れながらの安心感（アタッチメント）が情緒の安定に繋がるようにする事、本人が納得できる形で安心感が得られるようなしなやかな温かな受容に包まれた日々を積み重ねていけるようにする事、子どもが互いの「存在」に気づけるように、さらには互いの「思い」や「要求」に気づけるように、そして互いにみたとやつもり、ごっこなどのあそびのイメージをやりとりし広げ合えるようにする事が指摘された。

③「環境」ではそれぞれの発達過程に添った安全な環境づくりの配慮、それぞれの欲求が満たされる環境のほうが、乳児は安定して過ごすことができる事、配置なども、乳児の運動発達、探索活動の様子、興味に添った工夫などをしながら整えていく事、また、室内の音や色合いも環境として意識の中におき、保育者自身の話し方、服装、行動なども、環境の一部であることの自覚が必要である事が指摘された。

④「言葉」では、保育者は、この一語に込められた子どもの思いを捉え、その子の伝えなかった言葉を添えて補い、話したい気持ちを汲み取って会話の喜びを満たすことが大切である。また、言葉になる前の思いを表現していることを大人がしっかり受け止め、言葉で言い換えるという日々の関わりがとても重要である事が指摘された。

⑤「表現」では1～2歳児がリズムに合わせて鳴らすことは難しいが、さまざまな楽器に触れ、

どのような音が鳴るのか楽しむのもよい経験となる。また、体験をもとに生活再現遊びやごっこあそびを豊かにし、やってみたいという気持ちがふくらむ時期であるという事が指摘された。

V まとめ

V-1 乳児期の子どもに対する教育的なかわりとは

前述のIV-1～IV-2のテキスト類の引用やまとめをふまえて、乳児期の子どもに対する保育者の教育的なかわりを整理すると、下記の表5・表6のようになる。

表5・表6より、乳児期の保育において、教育的な関わりとしては、次の2点(1)(2)をおさえることが必要である。

表5 活動にかかわる保育者の教育的なかわり(テキスト類の文言から)

「発達に応じた保育」「環境との相互作用」 ○友達の気持ちや友達との関わり方を丁寧に伝えていくこと ○それぞれの乳児の発達にふさわしい玩具を選び、また安全性や衛生に留意しておかなければならない。 ○親しい大人とは積極的にかかわりをもとうとするので、生活のなかでのかわりを大切にし、一つひとつの行動を保育者がやって示しながら、ゆっくりはっきりした言葉で話しかけるようにする。 「活動の豊かな展開」 ○子どもが自ら向かうもの・ことを援助し、今を充実し続けたときに、その延長線上に「自立」ということがあると考えるものである。 ○どんな場面でも子どもの“やりたい”“やってみよう”と思う気持ちを大切に、更なる意欲につながっていくように配慮する。 ○安心して没頭できる遊びの環境と体験に、共感的にかかわることが重要である。 ○くり返すことによってイメージがより鮮明になり、確かなものになっていけるようにする。 ○日常生活の中で、“触れてみたい”“いじってみたい”という興味・関心を遊びの中で満たすことができるように用意している。 ○そんな子ども達の興味・関心、また探究心を思う存分満たせるように担任間で知恵を出し合い、おもちゃを用意する。

(1) ①「発達に応じた保育」については、保育の養護的側面(生命の保持と情緒の安定を図る機能)と教育的側面(乳幼児の遊びなどを通して経験を積み重ねていくことを援助する機能)は、切り離せるものではなく、密接に関連して日々の保育が展開されていくとまとめることができる。②「環境との相互作用」については、保育者は、乳児が興味・関心を示すものに感性のアンテナを張りめぐらせ、周辺的安全点検をこまめに行いながら、安心して没頭できる遊びの環境と体験に、共感的にかかわることが重要であると言える。③「活動の豊かな展開」については、子ども達の興味・関心、また探究心を思う存分満たせるように知恵を出し合い、環境を準備していく事が重要だと言える。

(2) 「5領域」については、子どもが自己を発揮し、乳幼児期にふさわしい経験が積み重ねられるよう、保育の内容を充実させていくことが指針にもふれられているが、テキスト類においては、例えば「健康」では、子どもの活動意欲を育てながら弱い部分を克服できるように、配慮していくことが基本的に大切。「人間関係」では、保育者の受容的なかわりのもとで、

表6 5 領域にかかわる保育者の教育的なかかわり（テキスト類の文言から）

<p>「健康」</p> <ul style="list-style-type: none"> ○子どもの活動意欲を育てながら弱い部分を克服できるように、配慮していくことが基本的に大切。 ○新生児期は、急激な環境の変化に対応できるように、保健的・衛生的な環境で保育することが必要である。 <p>「人間関係」</p> <ul style="list-style-type: none"> ○子どもが互いの「存在」に気づけるようにする。 ○互いの「思い」や「要求」に気づけるようにする。 ○互いにみたてやつもり、ごっこなどのあそびのイメージをやりとりし広げ合うことができるようする。 ○子どもは自発的に働きかけることが、周囲に受け入れられ、そのやりとりを重ねることでその周囲を理解できるようにする。 ○特定のおとなとの応答的なかかわりが心身の豊かな成長に大きく影響してくるために、子どもの思いに丁寧に対応していく。 ○子どものネガティブな感情に対して、タイミングを逃さない応答と抱っこや身体に触れながらの安心感（アタッチメント）が、情緒の安定に繋がるようにする。 ○本人が納得できる形で安心感が得られるようなしなやかな温かな受容に包まれた日々を積み重ねていけるようにする。 <p>「環境」</p> <ul style="list-style-type: none"> ○探索活動を楽しめる環境構成作り。 ○玩具の数も同じものをある程度そろえ、一人ひとりが満足できる配慮。 ○安全な環境づくりの配慮。 ○室内の音や色合いも環境として意識の中におき、保育者自身の話し方、服装、行動なども、環境の一部であることの自覚が必要である。 ○「見立て」「つもり」をいっそう豊かにするために、コーナーや壁面、収納棚等を利用して、どの子どもにも見やすくイメージが湧くような示し方をしておきたい。 <p>「言葉」</p> <ul style="list-style-type: none"> ○子どもの一語に込められた思いを捉え、その子の伝えなかった言葉を添えて補い、話したい気持ちを汲み取って会話の喜びを満たすことが大切。 ○乳児においては「泣く」「笑う」「身振り」で要求する」など、言葉になる前の思いを表現していることを大人がしっかり受け止める。 ○言葉で言い換えるという日々の関わり。 ○聴く力も話す力も、自分に共感してくれる大人が身近にいて、その人との信頼関係が確立していけるようにする。 ○子どもからの発声を待ち、一緒に会話をするよう語りかけることが、発語を促していくことにつながる。 <p>「表現」</p> <ul style="list-style-type: none"> ○保育の中に歌や楽器遊びなど、音楽を取り入れることは子どもの感性を豊かにする。 ○タンバリン・カスタネット・鈴など、さまざまな楽器に触れ、どのような音が鳴るのか楽しむように関わる。 ○お互いの気持ちがふくらむ時なので、友だちとのトラブルもありますが、大人が思いを十分に受け止めて、あそびの中で関わり方や友だちの「つもり」を学べるように関わる。

子ども同士がお互いの存在に気づき、ごっこ遊び等を通して、やりとりしあう中で、互いの思いや欲求に気づけるように援助していく。「環境」では探索活動を中心として、見立てつもり遊びを豊かにできるように、またイメージがより豊かにわくように援助していくことが必要である。「言葉」では、乳児においては「泣く」「笑う」「身振り」で要求する」など、言葉になる前の思いを表現していることを大人がしっかり受け止める。「表現」では、お互いの気持ちがふくらむ時なので、友だちとのトラブルもあるが、大人が思いを十分に受け止めて、あそびの中で関わり方や友だちの「つもり」を学べるように関わるということが示されている。

V-2 おわりに

保育所保育指針によると、保育所における保育は、「養護と教育を一体的に行う」ことが特性である。しかしながら、今回調査した限りでは、「教育」は、保育所保育指針に示されているような表現ではあまり見られないが、遊びを通して成長していく（発達していく）という事については、21冊のテキストでふれられていた。さらに、「教育」とは表記されず、「遊び」と表記されているものがほとんどである事がわかった。確かに、遊ぶことは学びにつながっている。乳児期は、生活そのものが学びになっている。また、テキストには保育所保育指針の内容をより具体的で、豊かに乳児の保育がイメージできる内容となっている事が示された。しかしながら、この時期の保育者のかかわりとして、テキスト類に明確に「教育」を意識しながら、遊びを捉えていく事が今後必要とされるのではないだろうか。

付表：分析対象のテキスト

- A あいり出版「シリーズ・新しい時代の保育者養成 乳児保育 一人ひとりの乳児期の育ちを支えるために」大方美香・中西利恵 2013
- B 建帛社「シードブック 乳児保育〔第3版〕－科学的観察力と優しい心－」川原佐公・古橋紗人子 2014
- C ミネルヴァ書房「乳児保育 第8版（現代の保育学8）」待井和江・福岡貞子 2014
- D 萌文書林「乳児保育－子どもの豊かな育ちを求めて－」阿部和子 2009
- E 光生館「乳児保育－0歳児・1歳児・2歳児－」巷野悟郎・植松紀子 2012
- F フォーラム・A「テキスト 乳児保育 改訂新版」穴戸健夫 2014
- G 解放出版社「根っこを育てる乳児保育～育児担当保育がめざすもの～」樋口正春 2014
- H 新読書社「かかわりを育てる乳児保育」全国保育問題研究協議会 2012
- I 北大路書房「新 保育ライブラリ 保育の内容・方法を知る 乳児保育【新版】」増田まゆみ 2014
- J かもがわ出版「「保育っておもしろい！」ブックレット 乳児保育」九州保育団体合同研究集会 常任委員会 2009
- K 萌文書林「乳児保育 一人一人を大切に」加藤敏子・富永由香 2011
- L 北大路書房「新 乳児保育への招待－胎児期から2歳まで」高内正子 2013
- M みらい「新時代の保育双書 乳児保育」大橋喜美子 2011
- N ミネルヴァ書房「新・保育講座④ 乳児保育〔第2版〕」阿部和子・大場幸夫 2009
- O 同文書院「はじめて学ぶ 乳児保育」志村聡子 2012
- P 青踏社「やさしい 乳児保育」伊藤輝子 2012
- Q ひとなる書房「改訂新版 資料でわかる乳児の保育新時代」乳児保育研究会 2013
- R ななみ書房「乳児の生活と保育」松本園子 2014
- S 南山堂「乳児保育」石原栄子・庄司順一・田川悦子・横井茂夫 2011
- T 同文書院「実践・乳児保育 子どもたちの健やかな未来のために」羽室俊子・荒木暁子 2012
- U 萌文書林「養成校と保育室をつなぐ理論と実践－新訂 見る・考える・創り出す 乳児保育」社会福祉法人あすみ福祉会 茶々保育園グループ 2014

文献

- 1) 阿部和子 2009 乳児保育ー子どもの豊かな育ちを求めてー 萌文書林
- 2) 阿部和子 大場幸夫 2009 新・保育講座⑩ 乳児保育〔第2版〕 ミネルヴァ書房
- 3) 石原栄子 庄司順一 田川悦子 横井茂夫 2011 乳児保育 南山堂
- 4) 伊藤輝子 天野珠路 2012 やさしい 乳児保育 青踏社
- 5) 大方美香 中西利恵 2013 シリーズ・新しい時代の保育者養成 乳児保育 一人ひとりの乳児期の育ちを支えるために あいり出版
- 6) 大橋喜美子 2011 新時代の保育双書 乳児保育 みらい
- 7) 加藤敏子 富永由佳 2011 乳児保育 一人一人を大切に 萌文書林
- 8) 川原佐公 古橋紗人子 2014 シードブック 乳児保育〔第3版〕ー科学的観察力と優しい心ー 建帛社
- 9) 九州保育団体合同研究会常任委員会 2009 「保育っておもしろい！」ブックレット 乳児保育 かもがわ出版
- 10) 巷野悟郎 植松紀子 2012 乳児保育ー0歳児・1歳児・2歳児ー 光生館
- 11) 穴戸健夫 2014 テキスト 乳児保育 改訂新版 フォーラム・A
- 12) 志村聡子 2012 はじめて学ぶ 乳児保育 同文書院
- 13) 社会福祉法人あすみ福祉会 茶々保育園グループ 2014 養成校と保育室をつなぐ理論と実践ー新訂 見る・考える・創り出す 乳児保育 萌文書林
- 14) 全国保育問題研究協議会 2012 かかわりを育てる乳児保育 新読書社
- 15) 高内正子 2013 新 乳児保育への招待ー胎児期から2歳まで 北大路書房
- 16) 乳児保育研究会 2013 改訂新版 資料でわかる乳児の保育新時代 ひとなる書房
- 17) 羽室俊子 荒木暁子 2012 実践・乳児保育 子どもたちの健やかな未来のために 同文書院
- 18) 樋口正春 2014 根っこを育てる乳児保育ー育児担当保育がめざすものー 解放出版社
- 19) 増田まゆみ 2014 新 保育ライブラリ 保育の内容・方法を知る 乳児保育【新版】 北大路書房
- 20) 待井和江 福岡貞子 2014 乳児保育 第8版（現代の保育学8） ミネルヴァ書房
- 21) 松本園子 2014 乳児の生活と保育 ななみ書房
- 22) 厚生労働省編 2011 保育所保育指針解説書 フレーベル館